ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「ピチュー、アイアンテール！」

　雅也の声が響く。辺りには、もう太一とノッポの男性はいない。戦闘開始早々、太一のミニリュウの『破壊光線』で、コドラを森の奥まで吹っ飛ばしたからだ。

　指示を聞いたピチューは、一気にサイドンとの距離を詰め、尻尾が光り輝く。だが、距離を詰められ、間合いに入られたはずのサイドンに、焦った様子はない。

「そんなちっちぇ尻尾が、効くと思ってんのかっ？」

「だったら、受けてみろ！」

　雅也がそう叫んだ刹那、横に振られたピチューの尻尾が、サイドンの腹に減り込んだ。

「なにっ？」

　苦しそうな声をあげ、仰向けに倒れかけたサイドンを見て、男は目を見開く。

「ピチュー、もう一発！」

「さ……下がれサイドン！」

　尻尾が空を切る。流石に受けちゃまずいと判断したのか、男がそう支持する直前には、サイドンは飛び退いていた。サイドンは四つん這いになり、頭のドリルを回転させる。

「つのドリル！」

「アイアンテール！」

　突っ込んでくるタイミングで、ピチューは銀色に光った尻尾を回転しているドリルに右横からぶつけ、逸らす。そしてそのまま、ピチューは右拳を握り締めた。川に突っ込みかけたサイドンに飛びかかり、顔を思いっきり張り倒す。

「な……なんだ、このピチューは……！」

　川に倒れたサイドンに男は驚きを隠せない様子で、小さくそう言った。ちなみに、雅也自身も少し驚いている。

　起き上がりかけたサイドンに、ピチューは今度は左から『アイアンテール』をぶちかました。川から出たサイドンは起き上がるが、もう既にフラフラだ。ここまでを見ると、ほぼピチューのである。

「く……クソっ！　サイドン、ふみつけ！」

　まさか子供相手に、こんな醜態をさらすとは思わなかったのだろう。男の声には、焦りの色が出ていた。それはサイドンも同じで、ピチューに踏みつける足は、ただ砂利を撒き散らすだけだ。

　それでも、何十発目かの『ふみつけ』が、ちょこまかと動き回るピチューの背中に命中した。ボフゥン、という音と共に、サイドンの左足元から土煙が舞う。

　ピチューはかろうじて、サイドンが踏みつけてきた足を両手で支えていた。だが、普段走り回る時、ピチューは少し屈んで、四つん這いに近い体勢で移動している。今回もその状態で、サイドンに踏みつけられたため、受け止めている腕に力が入らない。徐々に、サイドンの足が地面へと近づいていく。

「ふふふ……ふふふははははは！」

　狂ったように笑う男の顔からは、既に焦りは消えていた。今は、ただ踏みつけるサイドンの足をジッと見ている。

「終わった！　これで俺の勝ちだ！」

「……あれ、言わなかったっけ？」

　普通なら焦るはずのピチューのトレーナーの口から、そんな声が聞こえてきた。

「二人くらいなら、僕一人でも倒せるって言ったじゃん。何の理由も無しに、あんなこと言うわけないよね？」

　雅也がそう言った瞬間、サイドンの足元が輝いた。いや、正確には、光が吹き出た、というべきだろう。土煙から漏れ出るその光が強くなっていくにつれ、下がっていたサイドンの足が、だんだんと持ち上がってくる。

「な……な……」

　上がったり下がったりするサイドンの足元を見れば、ピチューはもういなかった。代わりに、光り輝く鼠が一匹、サイドンの足を持ち上げている。

　そして、その光が弾けるように消えた時には、サイドンはそれ以上、どんなに力を入れても、左足を地面に近づけることが出来なくなっていた。

「ピチュー、進化。よしっ、ピカチュウだ！」

　この現象は、雅也が少し前から予測していたことだった。なので、本来なら驚くようなことではないのだが、それでも嬉しそうに、拳をギュッと握り締める。

「な……何が進化だ！　体勢的には、まだこっちが有利なんだよ！」

「それはどうだろうね？」

　そう言うと、雅也は両手の平を、前に突き出す。普段はあまり使わないが、こんな時の『とっておき』の技が、ピチュー、いや、ピカチュウにはあるのだ。

　そして、足の下にいるピカチュウも、それを見て、ニッと笑う。

「起死！」

　オレンジ色の光が、ピカチュウの手に収束する。

「回！」

　そして、その光が嘘のように消える。空気が、凍ったように冷たくなる。

「生！」

　そう思った瞬間、サイドンの足元から爆発が起こる。音が聞こえた感覚はなかったが、二人と二匹は、音が耳を震わせる感触を知る。冷たくなったと思った空気に温かさが戻る中、仰向けにサイドンはよろめいた。

「なんだとっ？」

　そう叫ぶ男に、雅也はウインクをする。これが、とっておきの技『起死回生』だ。この技は、使うポケモンの体力が残り少ない程、威力が上がる技である。体勢はキツかったものの、あまりダメージを受けていなかったピカチュウからすれば、今のでも大した威力では無い。

「ピカチュウ、トドメの雷パンチ！」

　倒れることはなんとか防ぎ、地面に左足をつきかけたサイドンを指差して、雅也は叫ぶ。指示が聞こえた瞬間、ピカチュウも砂利の大地を蹴った。そして、サイドンの手前で大きく跳ねる。

「ば……バカめ！　タイプ相性を知らんのか！　地面・岩タイプのサイドンに『雷パンチ』が効くとでも――」

「効くさ！　だって……」

　ピカチュウが右拳を握り締めると、電流がそこに集まってきた。そして、その拳がサイドンの顔に触れる。

「殴られれば、誰だって痛いからな！」

　バンっ、という音と共に、サイドンは吹っ飛ぶ。

「な……に？」

　その先には、そのトレーナーが立っていた。ショックで動けないのか、その場に棒立ちになっている。勿論、倒れ掛かってくるサイドンを受け止めることなどできるはずもなく……

そのまま下敷きになって、両者共に気絶した。

　時は、少し前に戻る――

「ミズゴロウ、水鉄砲！」

　太一の声が響いた瞬間、ミズゴロウの大きく開けた口から、勢いよく水が放たれる。

　ノッポの男とコドラを『破壊光線』で吹っ飛ばした太一は、ミニリュウ、リオル、ミズゴロウと共に、雅也から離れた所で戦っていた。

「ちっ、コドラ！　アイアンヘッド！」

　その水を額で受けながらも、コドラはミズゴロウに突進していく。水飛沫が舞う中、コドラの頭が銀色に光った。

　しかし、そのコドラを、左からリオルが飛び蹴りをかまして、攻撃を逸らす。それに怒り狂ったのか、主人の命令より早く、コドラはリオルに突進していった。

「あ、バカ！」

　主人のそんな声が聞こえた瞬間、川に身を潜めていたミニリュウが飛び出てくる。額は既にエネルギーが集まっていて、ガラ空きの背後に向けて、ミニリュウの『破壊光線』が放たれた。

　その『破壊光線』は狙っていた尻には当たらず、そのすぐ下の砂利に当たった。砂利は爆発したかのように土や小石が空にまき散られ、衝撃でコドラは仰向けにひっくり返る。まるで、亀がひっくり返ったかのように、四本の足をジタバタとさせるコドラ。鳴き声も、完全に慌てている。

「しまった、コドラ！」

　まき散った砂利のせいで、暫く前が見を見ていなかったのだろう。ひっくり返ってからタイムラグがあって、ノッポの男がそう叫んだ。

「よっしゃ、よくやったミニリュウ！　次はあいつだ……破壊光線！」

　一瞬だけガッツポーズをした太一は、続けて男に指を向ける。ミニリュウの額の突起にエネルギーが溜まり、金色のレーザーが放たれた。

　だが、ノッポの男は寸前で、川に頭から突っ込みながらも、それを躱す。

「あ……あぶねえだろ！　んなもん人に向かって撃っていいもんじゃねーだろバカ野郎！」

「……あぁん？」

　川から息も絶え絶えに叫んだ男の発したそのセリフに、太一が眉を寄せる。

「じゃあ、てめぇらがキリンリキにしたことは何なんだよ」

「いや、あれは」

「俺に言わせれば、ライフルこそ『向けて撃っていいもんじゃねぇ』と思うんだけどよ、そこんとこどうなんだ？」

　そして、太一は再び、人差し指を相手に向け、口を大きく開く。

「死んで詫びろ！　ミニリュウ、破壊光線！　ミズゴロウ、水鉄砲！」

　そして、その指をそのままコドラにスライドさせる。

「リオル、そいつをぶっ潰せ！」

　太一の怒鳴り声が響く。男に『水鉄砲』と『破壊光線』、コドラにリオルの『はっけい』が撃ち込まれるのは、ほぼ同時だった。

「あっ、太一！」

　遠くから走ってきた太一を見て、雅也が叫んだ。その隣に三匹のポケモンがいて、それが雅也を安心させる。

「よっ、勝ったみたいだな」

　右手を上に上げながら、太一は雅也の隣でぐったりしている男を見る。その後、視線をサイドンにずらし、最後に……

「おっ、そりゃピカチュウか？」

　喜々としてシャドウボクシングらしき事をしているピカチュウと、ポケーっとそれを眺めつつも近づいていくリオルを見て、太一が笑顔を見せて、そう言った。

「まあね。そろそろ進化する頃合かと思っていたよ」

　Ｖサインをする雅也は、実に嬉しそうな顔をしていたが、コホンと咳払いを一つすると、急に真剣な顔を作る。

「ところで太一」

「ああ。分かってる。キリンリキだろ？」

　そういうやいなや、二人は靴が濡れるのもお構いなしに川を横断し、キリンリキの所に駆けつけた。

「……どう？」

「大丈夫だ、と思う」

　太一はキリンリキの後ろ足をジッと見ると、キャンプボーイの制服のポケットから、何かの液体が入ったスプレーっぽい容器をいくつも取り出した。ちなみに、どれも雅也は見たことが無い。

「じいちゃんお手製の傷薬だ。普通に売っているやつも、いくつかある」

　そんな雅也に気づき、太一はいつになく真剣な眼差しで言う。

　雅也は、慣れた手つきで傷口にスプレーを吹きかける太一を、暫くジッと見つめていた。何か手伝えそうな事をしようとするも、その鮮やかな太一の手つきは、どうやら素人の手など必要なさそうだった。

　何もせずにボーッとしていた雅也だったが、よく考えてみれば、これはあくまでも『応急処置』だということを思い出す。

「救急車、呼んでくる」

　慌てて立ち上がる雅也。だが、その時――

「ああ、頼――」

「太一、危――」

　雅也がそう叫ぶのと、太一のキャンプボーイキャップが、弾かれるように空に吹っ飛ぶのと、ほぼ同時だった。鋭く尖った銃声のような音が、その後から聞こえた、そんな幻聴を、二人は聞いた気がした。

　二人の目に、最初に倒したはずの背の低い男が立ち上がっているのが、飛び込んできた。